



文化財愛護シンボルマーク

第3号

平成16年2月1日発行
岩沼市教育委員会
TEL 0223-22-1111
岩沼市桜1-6-20

岩沼市文化財だより



渡辺庭園

近江八景を模した庭園
市指定文化財 昭和44年5月29日指定

文化財探訪のすすめ



岩沼市教育委員会教育長
影山 一郎

あなたの「おすすめ文化遺産は」

「行ってみたい文化遺産は」何ですか？
これが、ある旅行会社のアンケート調査であります。

その結果、海外編では一位が中国の「万里の長城」、二位はエジプトのピ

ラミッドであり、国内編では一位が日光東照宮、二位は姫路城でした。

人生を豊かにするため、私たちはそれぞれの価値観のもとにスポーツ活動や文化活動などさまざまな楽しみを持つとうとします。

私はそのなかでも是非、楽しみもの一つに文化財の探訪を加えていただきたいと思うのです。美術館や博物館などに出かけ絵画や彫刻の作品を鑑賞すること、由緒ある神社・寺院巡りや建物や庭園などを見学すること、伝統的な音楽や芸能の鑑賞に出かけることも人生の楽しみです。

でも、そのことは、わざわざ外に出かけなくとも岩沼市内で探訪できるものがたくさんあります。

普段、何気なく見ている民家や路傍のお地藏様、蔵や石碑や街並みなども立派な文化財であり、それらを巡り歩くのも大変面白いものであります。

このような経験はないでしょうか。
『家の近くに横道がある。ある日、ふと思いついて初めてその道を逆行してみた。角を曲がった瞬間「おや？」と新鮮な驚きを覚えた。見慣れたはずの冬木立や植え込み、建物の影などが

まったく別の新しい何かに見えた。

光線の向きが違うせいかな、気分がのんびりしているからそう感じるのかな、と小さな発見に微笑みながら歩いてきた。その時、急にすることに気付いた。普段、すっかり見つけていたものでも、片道だけの心象風景ではなかったのか。『片道だけの心象風景、これは日常時々感じることであります。同じ場所での行き帰りの風景は趣が違い、時には新鮮な感動すらあります。一つの道をただひたすらに前へ前へ歩くだけでなく、時には逆行をしてみるのも楽しいものがあります。

「文化財」は、人間のさまざまな生産活動の中で生み出された有形・無形の文化遺産であり、先人が残してくれた貴重な財産であります。

時には道を、時代を逆行して文化遺産に目を向け、岩沼再発見の散歩に出かけてみてはいかがでしょう。きっと、すばらしい「何か」を、「町の良さ」を感じるに違いありません。人生の楽しみ方の一つとして声を大にしておすすめいたします。

渡辺庭園

岩沼市文化財保護委員 千葉 宗久

渡辺庭園は阿武隈河岸の玉崎地区に位置しており、昭和四十四年五月二十九日に岩沼市の文化財に指定された。

庭園の所有者である渡辺家は天和二年（一六八二）に艸肝入、御城米方御用に任命された家柄であり、代々阿武隈川の統制にあたるとともに、船主や商荷物継送の間屋、旅館なども手掛けていた。

○築庭について

庭園は文久三年（一八六三）に肝入だった渡辺吉兵衛さんが伊達家に願い出て「ひろま（玉崎荘）」の周囲に築いた庭である。

築庭にあたっては、仙台藩の御抱えの庭師だった清水道観とその弟子星野益三郎が携わった。

庭園の面積は約三百十坪あり、全景は近江八景を模しているといわれている。

○樹木について

『岩沼市史』によると、庭園には二十六本のさつきを主として四本の松や、

こうやまきなどが植えられている。

その他の樹木としてはきんもくせい・かし・玉ひば・玉おっこ・さざんか・紅梅・ゆずり葉・つげ・南天などが挙げられる。

○古松について

塀中門から庭に入っすぐ左手にある松は、形の良い素晴らしい松である。

渡辺家二十二代目の信一氏の『渡辺庭園及問屋の由来について案内』によると、この松は金沢の兼六園の古松と兄弟松であると書かれている。

現在の当主渡辺省三氏の話によると、この松に鳥が巣を作ったり表面にこけが生えたりして樹勢が弱まった時



▲松の古木

期もあつたが、いろいろ手を尽くした結果現在は元氣を取り戻したというところである。

○庭石について

庭園内には四基の石灯籠や二十個の置石、金魚池、そして百十個の踏石が配置されている。

踏石は全部伊豆産であるという。

○石灯籠について

灯籠は、「月見灯」「春日灯」「雪見灯」「五重灯」と名付けられており、いずれも風情がある。

これらの灯籠は、伊達家の郷六御殿の庭園にあつたものを拝領したそうである。

○紋章石について

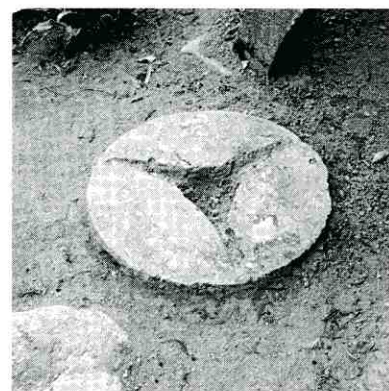
踏石の中に、印章の刻まれた円盤状の石が三個ある。

これらは清水家の紋章石で、永久に築庭の責任を伝えたものといわれている。

○まとめ

バブルの時期だったと記憶しているが、文化財巡りで玉崎問屋を訪れた時に先代の信一氏に詳しい説明をいただいた。

その時の余談に「玉崎荘と庭園を



▲庭師清水家の紋章石

合わせて一億五千万円で譲らないか」と東京の方から持ちかけられたことがあつたという。その理由を尋ねたら、「立派な庭園を世間に紹介するために古い座敷を中心にして料亭を始めたい」と答えたそうである。

この話は信一氏がお断りしたそうだが、嬉しそうに話してくれた姿が懐かしく思い出される。

○引用参考文献

- ・宮城県教育委員会：『宮城の古民家』
- ・岩沼市：『岩沼市史』
- ・千葉宗久：『玉崎問屋・渡辺家』いわぬま歴史散歩 23
- ・千葉宗久：『渡辺家の玉崎荘』いわぬま歴史散歩 104
- ・千葉宗久：『渡辺家の庭園』いわぬま歴史散歩 105

島貫兵太夫記念碑

岩沼市文化財保護委員長 高橋 鼎

市役所向かいの勤労青少年ホーム
駐車場西側に「島貫兵太夫記念碑」
が建っている。

背面には、「一九八〇年（昭和五
十五年）七月建立・岩沼市長・財団
法人力行会・学校法人東北学院・財
団法人宮城県海外協会」と刻まれて
いる。

表には島貫氏のレリーフがあつて
その下に、

「私は青年が好きである。活動的
な積極的な生気に満ちた青年が好き
である。進むことを知って退くこと
を知らない青年が好きである。奮闘
努力の気性、自己発展の勇猛心を持
った青年が好きである『力行会とは
何ぞや』より」

という文が刻み込まれている。
又、脇の石には島貫兵太夫略歴が
彫り込まれている。

氏は、慶応二年（一八六六）に名
取郡岩沼町本郷（現岩沼市桜二丁目）
の士族島貫資澄（寛治）の長男とし

て生れた。明治七年（一八七四）、
同町の医師安部賢斎（賢蔵）の学僕
となったが、志を変えて教育界に身
を投じた。明治十二年小学校第四級
に入学、翌十三年に卒業し、小川村
小学校代用教員に任じられ（月給三
円五十銭）、十五年中学校訓導とな
る。同十六年（一八八三）、植松村
小学校校長となり、同年末に増田町
高等小学校主席訓導となる。

この間仙台にてキリスト教に帰依
し、押川方義氏より直接洗礼を受け
て熱心に伝道した。明治十九年（一
八八六）、アメリカ人W・E・ホーイ
の創設した仙台神学校（東北学院の
前身）に入学、同二十四年第一回卒
業生となった。学生時代から貧民の
救済を志し、同二十五年東北救世軍
を組織して宮城、福島、山形に伝道
した。明治二十七年（一八九四）上
京して押川氏の海外教育協会を応援、
且つ日本橋区大江町教会の牧師となつ
た。明治二十九年に志賀子夫人と結
婚して東京労働会を設立して多くの
苦学生の世話をした。更に翌年、社
会事業視察のために渡米、三十一年
帰国して苦学生を渡米させるために

活躍した。明治三十三年に東京労働
会は「日本力行会」と改称した。そ
して雑誌『力行』を発行し、米国が
苦学生にとってよい環境であると知
り、事業を一般の人々の海外移民に
まで拡張し、没するまでに世話をし
た会員の数は八五〇〇名、在米会員
は三〇〇〇名に達したという。著書
に、明治四十四年に世に出した自叙
伝『力行会とは何ぞや』の他、『渡
米策』（明治三十七年）、『新苦学
法』（明治四十四年）、『新渡米
法』（明治四十四年）などがある。

この「力行会」に石川啄木が、
東京で大変な世話になっている事実
がある。

石川啄木は、盛岡中学の最終学年
に、学期試験に不正行為（二度目）
をしたために停学処分になってしま
う。そして卒業が翌春であるのに明
治三十五年十月二十七日に突然、退
学届を提出してしまうのである。三
十日には上京の途につき十一月一日
に上野着。上京の当面の目的は五年
生への編入可能な学校を探すことで
あったが、それが不可能と知るや、
正則英語学校へ入学しようとした。

しかしこれも授業料が高くて断念せ
ざるを得なかった。失意のどん底
に陥った。

石川啄木が日本力行会苦学部の中
田寮に泊まったのはこの頃である。
この寮の金子定一という友人が居た
部屋に転がり込んで方々を訪問した。
当時の日記に、明治三十六年の元旦
を「ムサ苦しい神田錦町三丁目の力
行会の破れ障子の裡…」に送ったと
記されている。啄木はやがて生活に
窮し、果ては病に倒れ、二月二十六
日には父一禎の迎えで帰郷し、病を
養う身になってしまふのである。

啄木は「渡米志向」を有していた
ようだから、当然島貫氏に面会して
指導を仰いだに違いない。

氏は大正二年九月、四十七歳で逝
去。昭和三年の天皇陛下御即位の大
典に当たり、海外移民事業功労者と
して銀杯一組が授与された。



▲島貫兵太夫記念碑

路傍の石碑(神仏)を尋ねて

岩沼市文化財保護委員 阿部 昭平

民間信仰の記念碑として、主に江戸時代から明治にかけて、辻つまり十字路や村境、田畑や川岸等の路傍に石碑が建てられていました。それらは現在道路整備などにより多くは寺や神社やお堂の周囲に集められ昔は何処に建てられていたものか判別は出来ませんが、見つめていると当時の素朴な庶民願望の姿が見えてきます。



▲阿武隈川土手下の風景

写真は阿武隈一丁目の峯岸新市氏の前の石碑群です。昭和七年鉄橋が

架けられるまでは、岩沼から向かいの逢隈に渡る所が「藤場の渡し」で、上流に「稲場の渡し」があり、寛政の頃林子平が江戸登りに友人に送られ別れを惜しんだのが阿武隈の河畔といわれています。

これらの石碑のいくつかは土手に建てられていたと聞きました。

馬頭観世音 安永九年(一七八〇)
子安観音 文化三年(一八〇六)
金華山 嘉永二年(一八四九)



▲神明社の風景

押分御伊勢原の神明社境内にある石碑群です。

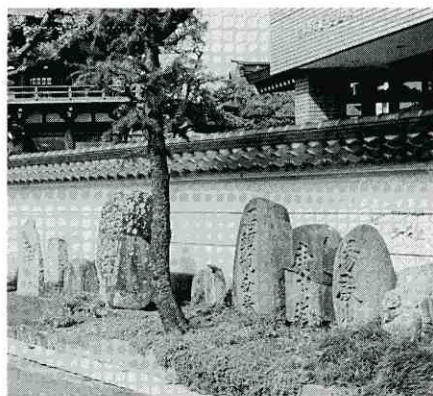
庚申供養塔 明和五年(一七六八)
小牛田山神 弘化四年(一八四七)
愛染明王 安政五年(一八五八)

小牛田山神には願主おはるの外およね・おとらと刻してあります。愛染明王は、人間が愛欲によって崩壊するのを防ぎ葛藤を解き菩提の心に変えると言われています。

庚申信仰は、中国の伝統宗教である道教では、人体に三戸さんしが宿りこの虫は六十日毎にくる庚申ねぼり(かのえさる)の日の夜に人の睡に乘じて人体を抜け出し天帝に宿主の罪業を報告するので、天帝は報告に基づいて人の寿命を差し引くと言われています。そこで人々は庚申の晩は当番の家に集まり勤行で朝を迎え三戸の報告を阻止するので、延命招福を得ることが出来るとされ、また村人の連帯にもつながったと言われています。

勤行のときは
オコウシンデ コウシンデ
マイトリ マイトリ ソワカ
と言う庚申の真言を唱えることになつていたようです。

次の写真は明治維新の際、神仏分離令によって廃寺となった竹駒寺が明治三十八年現在地に再興された門前の石碑です。



▲竹駒寺前の風景

ここでは、馬市が有名だった事もあつて馬頭観世音が目立ちますが、これらの石碑は牛馬を埋葬した墓ではなく牛馬の無病息災とか長寿や安産を願うものや供養塔が多く見られます。これらの年代は

天保六年 (一八三五) 高橋屋養助
安政五年 (一八五八) 博労連中
明治十二年 (一八七九) 八島英雄
昭和十二年 (一九三七) 斎藤軍平
などが読みとれました。

故郷の景色ともいえる路傍のこうした石像を見ると、何かしら心の安らぎを覚え傍らに野の花が添えられた風景を見ると地域の人々の心情が伝わってきます。

後世に残したい文化遺産として大切に保存したいものです。

藍と北町の染物屋さん

岩沼市文化財保護委員 伊藤 礼子

藍は名取耕土の重要な換金作物でした。会津に送る藍の買い付けを記録した寛政二年の「染藍玉買方控帳」や、藍の間屋であった下野郷安久津家の「葉藍仕入れ帳」等が残っており、藍染が盛んであった江戸後期から明治の末にかけての商いを知ることが出来ます。

○北町の染物屋さん

この度、後継者がなく店を閉じることになった北町の斉藤染舗さんは、一五〇年の歴史を持つ由緒ある染物屋さんでした。初代は、道の向かいにあった菅井長者（岩沼物語一三六頁）家抱えの漢方医師で、名は「三祐」。品のある当時の鑑札が今も残されております。

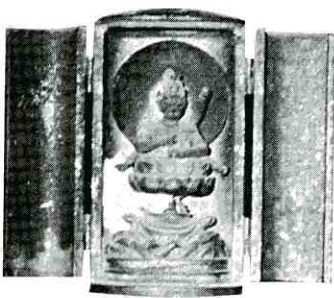
当主十代目宗三さんの曾祖父喜平（文政元年生）さんが、農業の傍ら染物屋を始めたのは、嘉永三年（一八五〇）で、祖父徳三郎（明治十一年生）さんと販路拡張に歩いた祖母くら（明治十三年生）さ

ん、父徳太郎（明治三十七年生）さんへと受け継がれてきました。また明治の末頃より京染め取り次ぎを始め、外に着物の洗い張りなども行っていました。

昭和十一年生まれの宗三さんが子供の頃の店の作りは、表に格子戸、土間に十個程の藍甕が口の上部を出した状態で埋めてあり、毎朝かき混ぜたと言います。

甕は、籾殻や大鋸屑を燃やして柔らかく温度をとり、寒い季節でも染めることが出来るようにしてありました。染めた物は、糸、木綿、かんばん（印半纏・法被）などです。

昭和二十年頃には、衣料品不足のため丸染と称して各家庭から頼まれて、服やズボンを黒や紺、茶色に染めましたが、昭和三十八年には藍の甕



▲愛染明王

もとり外し、屋号も斉藤染舗となりました。

藍染めは、農家では自家製の染めを行っていたところもあります。町場では、上等な藍染めを求める人々の需要に応じて繁盛していたことが伺われます。

○藍づくりの絵馬（市指定文化財）

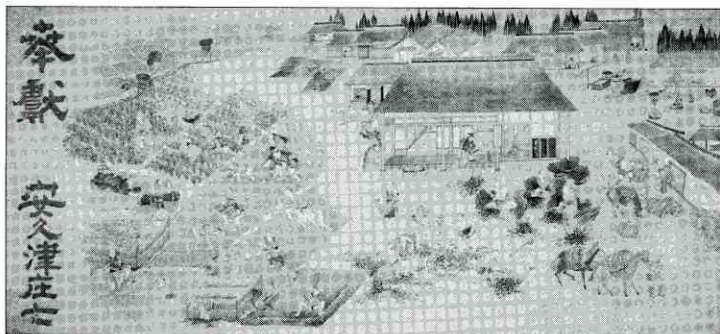
藍づくりの絵馬は、下野郷愛宕神社に隣接する安久津家八代目庄七氏によって明治二十年頃奉納されました。絵馬には、種まき、栽培管理、出穂直前の刈り取り、籾

に広げて乾燥し、茎を除き、次の日日没までに葉藍として俵に詰め馬で運びだすまでの様子が描かれています。絵馬を奉納された安久津家の屋敷は、七反歩ほどの広大な敷地です。屋敷の正面の桁行二十間土蔵造りの長屋門を入ると、かつての藍の干し場と土蔵造りの旧藍小屋が残っており昔の面影を止めています。

○むすび

斉藤染物屋さんの特徴は、店先に据えられた藍甕にありました。藍で染めるには、灰汁の選択、葉

藍を発酵させてつくるすくもの出来具合、天候、時季など数えればきりがないほどの条件がありました。代々の人々は、精気輝く藍の華（染色可能となったときの茄子色の泡）が建つことを願い愛染明王（染物屋の守り本尊）に祈ったと言います。この度、斉藤染舗さんから市教育委員会に寄贈されたのはその愛染明王です。今後文化財の展示に活用されることが期待されます。



▲藍づくりの絵馬 市指定文化財 昭和48年3月27日指定

平成十五年度 文化財めぐり報告

市教育委員会生涯学習課では、文化財に対する知識の向上と保護思想の普及を図るため、市民を対象に「文化財めぐり」を開催しております。

今回は六月と十一月に、岩手県一関市を訪れました。

一関市は国の名勝天然記念物に指定されている厳美溪で有名ですが、江戸時代、岩沼領主だった田村家が一関に所替えになったという縁があります。

両日とも天候に恵まれ、参加者は三十名を越えました。

現地では、まず一関市博物館を訪れました。

学芸員の方の丁寧な説明に参加者も熱心にメモをとっていました。

また、昔の岩沼の絵図を特別に見せていただき、参加者たちは、ほぼ今の岩沼の町並みと変わらないことをあらためて感じとっていました。

午後はバスに乗り、車窓から一関城跡（現在は釣山公園）を眺め、田

村家の菩提寺である祥雲寺を訪れました。

ここでは田村家愛用の品々が展示されている田村記念館や六角堂などを見学しました。

岩沼と一関市との歴史のつながりを体感した今回の文化財めぐりは、参加者から大変好評でした。

近年の急速な開発行為などで、先人達が残してくれた貴重な文化財が失われつつあります。

次回も文化財保護の一環として「文化財めぐり」を開催する予定ですので、皆様の参加をお待ちしております。



▲ 祥雲寺にて(11月20日撮影)

岩沼市教育委員会 生涯学習課からのお知らせ

① 第三回文化財企画展「発掘された岩沼の遺跡」

内容 市内の県指定埋蔵文化財のうち、下野郷館跡、引込横穴墓群、鵜ヶ崎城跡、長徳寺前遺跡からの出土品を中心に展示します。

期間 平成十六年三月十三日～二十日まで

場所 岩沼市民会館中ホール

入場 無料

※詳細については、市の広報でお知らせいたします。

② 名勝及び天然記念物等の保存及び管理について

内容 先人達が残してくれた文化財は、我々が後世に伝えるべき貴重な財産ですが、最近、無許可の現状変更など不適切な事例が全国的に相次いでいます。名勝、天然記念物、埋蔵文化財包蔵地及びその近接地を開発する場合は、事前協議が必要です。詳しくは、市教育委員会生涯学習課まで連絡願います。

③ 「文化財だより」の原稿募集！

内容 岩沼に伝わる古い風習、伝統、歴史的な話などについて原稿を募集します。

募集 四〇〇字詰め原稿用紙二～三枚程度

④ 岩沼市文化財保護委員紹介

岩沼市文化財保護委員は、岩沼市の文化財行政に対して、調査審議しております。平成十五年九月一日付けで今回新しい委員が決まりましたので、ご紹介いたします。

森田恵美子先生

現在、県立名取北高等学校で教鞭をとられております。専門は中世史です。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

岩沼市教育委員会生涯学習課
内線(五七三)